

大規模ほ場整備に向けた高収益作物の 生産モデルの策定

東近江農業普及指導センター

【普及活動のねらい・対象】

東近江市八日市地域では、16 集落(約 680ha)で大規模な国営ほ場整備が予定されており、完了後には、高収益作物として野菜と小豆を約 200ha 導入する計画となっています。すでに9 集落では、将来を見据えタマネギ、キャベツ、ニンジン、小豆などの栽培を始められていますが、小規模な取組となっています。今後、高収益作物の大規模な生産を推進するためには、それに対応した機械化体系の導入や集落間連携など新たな生産体制の構築が必要となります。令和 3 年度はキャベツの生産モデル策定し、1 集落でモデルに沿った機械が導入されました。

今年度は、ほ場整備を予定している集落を対象として、タマネギと小豆の生産モデルについて検討し、大規模な高収益作物生産の円滑な導入をねらいとして活動しました。

【普及活動の内容】

タマネギについては、大規模な栽培に対応するため、底面給水育苗、衛星によるリモートセンシングと可変施肥、高速移植機、オニオンハーベスタなどを関係機関と連携して実証および実演会を開催しました。

小豆については、機械収穫した場合にも収量確保ができる栽植密度について実証しました。



写真1 オニオンハーベスタの実演会

【普及活動の成果】

タマネギでは、灌水作業の省力化と機械移植に対応した苗生産ができました。また、実証機械により作業時間は慣行と比べ、移植で約 60%、収穫で約 40%削減でき、センシングによる可変施肥は、基肥の施肥量を 20%削減できました。小豆では、播種時期の天候に収量が大きく影響を受ましたが、播種量を増やすことで、120kg/10a の収量を確保できました。さらに、実証結果をもとにタマネギと小豆の生産モデルの作成と提案を行いました。

今後も関係機関とともに、高収益作物の大規模な生産に向け、引き続き支援します。

◎対象者の意見

野菜の生産には、多くの人員が必要となっていますが、大規模な生産に向け育苗から収穫までの省力的な体系のイメージができました。今後、本格的な取組に向け集落間の連携など仕組みづくりについても支援をお願いしたいです。(A集落営農法人代表理事)